

東より子著

『宣長神学の構造——仮構された「神代」』

(ペリカン社・一九九九年)

表 智 之

本居宣長は、まことに巨大な存在である。近世思想史上に残した業績と影響の大きさ。研究史の膨大な蓄積——それはいまでも毎年々々コンスタントに増え続けている。中でも、近代において日本の文化や国語を語る諸々の学問的言説が、宣長が提示した枠組みの影響下にあり続けていることは看過できない。

『古事記伝』の精緻な注釈を持つ実証性——近代の学問が言うところの——と、その序論たる「直毘靈」のイデオロギー性とは、表裏一体の関係にあるのであり、後者を何らかの形で棚上げし前者を近代の文献学や国語学の先駆として賞賛する者は、みずからの拠って立つ近代の学知の実証性の裏に、宣長と同じ自己言及性が潜んでいることを隠蔽してしまうのである(子安宣邦「宣長問題」とは何か)。したがって宣長についての思想史研究は、宣長を語るみずからの分析がそのまま、近代を生きたみずからの自己言及と化す危険に対して敏感であらねばならない。宣長という対象は、資料の多さと活用のしやすさ——全集の刊行や記念館の設立など——からくる研究条件の良さとは

裏腹に、研究者の方法的自覚が試されるやっかいな対象なのである。

さて、本書の視点であるが、宣長の知的営為を「神学」として捉えようとしている。すなわち著者は「序」に次のように言う。

一般に「神学」とは、宗教が自分にとって何を意味するかを問う信仰者の立場から、既成の宗教を反省的に研究する規範的学問を意味している。だから、新しい「神学」の成立には、何らかの宗教上の危機が存している。(七頁)

「神学」という語には、近世的には垂加神道などの神道家の、近代的にはキリスト教の、イメージがつきまわっているが、ここではより一般的に、上のような意味の「神学」でもって宣長の思想を捉えようというのである。それはすなわち、宣長という一人の信仰者の営みとして、みずからの存在基盤や生の規範を『古事記』への注釈によって解き明かす作業として、『古事記伝』を読むということであり、同時に、神代の事跡をめぐる宣長の精緻な注釈についても、歴史的事実よりはむしろ信仰的事実を究明する作業であったと捉えることになる。

そもそも「神代」の古伝説というものは、特定の人々が作為したものではなく、長い時間をかけて多くの人がびとが語り伝えてきたいわば信仰的な事実であった。しかし、近世の知識人は、歴史的事実とは異なる信仰的事実という、古代人の意識における心的事実についての明瞭な観念を有する

までには至っていない。 (一一頁)

たとえば天照大御神について、『古事記』の記述をそのままに受け止めれば、太陽であると同時に人の姿を持った神でもあるという不条理な事態となるわけだが、宣長はそれを不条理のままに受け取れ、信ぜよと言う。しかし、宣長に先立つ新井白石や山崎闇斎がそうであったように、近世の記紀神話解釈はそういう不条理を理解可能な形に読み替えようとした。宣長に言わせればそれは、人間の理屈を神の世界に持ち込むことにはかならず、神代の不可思議を人智ではかるのではなく、神代の不可思議をそのままに受け入れ、人間の存在基盤や生の規範とせよ——宣長はそう主張したのである。

宣長の学問的業績を近代から見ても評価する場合、語法や音韻についての考察が国語学によって評価されたり、『古事記』異本の校合や表記法についての考察が文献学によって評価されたりするわけだが、『古事記』を通して古代日本の心性——世界観や善悪観など——を明らかにした、日本文化の根底を明らかにしたとして評価されるケースも多い。しかし宣長にとつてその古代日本の心性とは、客観的に明らかにすべき対象として自己の外側にあるわけではない。古代人の心性を我が心性とし、みずからの存在基盤や生の規範を確立することを宣長は目指していたのであり、その意味でそれは外側ではなく自己の内側にこそ構成されるべきものであった。『古事記伝』を、信仰者としての宣長による信仰的事実の究明作業と見る本書の視点は、

まさにその点にこそ、精緻な実証性とイデオロギー的な自己言及性が不可分に結びついた『古事記伝』の特質を捉えるのである。

ところで、『古事記伝』が自己言及的な構造をもっている——とはそもそも子安宣邦の指摘であったが、その場合の自己言及性とは、『古事記伝』が宣長の自己同一性構築作業であったと単に言ったものではない。自己の自己たる所以を「日本」あるいは「日本文化」に求め、そのありようを学問的に実証してゆくという『古事記伝』の枠組みが、宣長とその『古事記伝』に対して近代の側からなされる言及の中で絶えず再生し反復されていったことこそが、問われるべき問題として提示されていた。『古事記伝』が宣長という一人の人間の内面的過程と不可分でありながら、それがいわばその外に、後代の多くの人々の内面的過程にまで力を及ぼしてしまったことこそが重要なのである。

それに対して本書は、同じく『古事記伝』に自己言及性を見いだしつつも、それをテキストの外側に結びつけることは控える、というスタンスを取っている。『古事記伝』が自己言及的であるならば、そこで宣長の自己なるもの——「古へ」なるもの——がどのように構築されているのか、それを内側から丹念に明らかにすることが重要なのである、と。

国学のように、他国ではなく自国の古代文化を研究する、本質的に自己探求の意味を担っている思想に対しては、た

とえ「日本は日本である」というトートロジーに陥る危険性はあっても、思想主体の内的なあり様を捨象することはできないと思われる。つまり、宣長の精緻な注釈学は、自己の生を弁証し時代の課題に応える周到なロジックにほかならないのであるから、『古事記』注釈を通して構築した「神学」のイデオロギー性を解明することが不可欠なのである。

(一七頁)

「直毘靈」に代表される宣長のエスノセントリズムは、明治維新以来の（そして悲しいかなこんにちに至るまでの）日本人の日本人としての自意識の形成に明らかに影響を与えており、侵略戦争をはじめ多数の愚行を生み出す力となっていたことは決して否定し得ない。そのことを視野に——具体的な叙述としてはともかく、少なくとも問題意識の前提に——入れずして、宣長についての思想史研究は成り立ち得ないし、そうでなければ意味がなかるう。とは言え、そういった近代における宣長神学の再生の問題と、宣長自身がどういった課題を背負っていたか、その課題にどういった形で応えたかといった問題は、具体的な作業としてはとりあえず別物ではある。したがって宣長自身に即した研究もまた重要なのであり、その意味で本書のスタンスとその成果は高く評価できるだろう。だが、人間が社会的存在である以上、宣長の信仰者としての内面の過程もまた社会と隔絶したものではありえない。『古事記伝』というテクストも、それが実体を持った書物である以上、また様々なテクストが先

行して存在している以上、他の思想家やテクストから切り離して単体でその構造を問えるものではあり得ない。本書のこのような問題点については、本文の具体的な論点に触れた上であらためて述べるが、ここでひとまず簡潔にまとめておこう。「宣長神学」の構造を問うならば、『古事記伝』という作品の内部の概念やロジックの相互連関を跡づけるだけではなく、『古事記伝』が他のテクスト群とどういった緊張関係にあり、どういった概念やロジックでもって他のテクスト群を乗り越え、新たな「神学」としての力を獲得し得ているかを明らかにするべきだったのではないかと私は考える。

さて、ここで本文の構成を目次によって紹介しておこう。本書は、序およびあとがきと、次に示す七章よりなる。

- 第一章 宣長神学の成立——「自然」から「神」へ
- 第二章 『古事記伝』の方法——「記紀神話」の成立
- 第三章 神々の実在——「現身」と「御霊」
- 第四章 三層構造のコスモロジー——「国」概念の発見
- 第五章 「神代」の理法——「吉凶相根ざす理」
- 第六章 国家秩序の生成——「事依」と「相並」
- 終章 宣長神学の行方——「神代」観の変質

本書の根幹をなしているのは、宣長における「自然」から「神」への転換の問題である。まず第一章では、賀茂真淵の影響のも

と「自然」(「おのずから」)でもって人の生を意味づける立場をとっていた宣長が、たとえば天照大御神に主宰神としての性格を見いだし、あるいは産霊神に万物を生み出す力を見いだし、そういった神の存在によって人の生を新たに意味づけるに至る過程を「もののあはれ」論との関わりで明らかにしている。神代の神々が人の生を意味づけるありようは、垂加神道の場合のように儒教的な理を神々が象徴するのではなく、宣長にとっては神が明確な形を持って実在することが重要であった。神を象徴としてでなく実在として捉える立場から、宣長は『古事記』の各段を一貫したストーリーに編み直すのであるが、その際の資料操作については第二章に、概念操作については第三・四・第六章に述べられている。第五章は、そうして編み上げられた神代の事跡が、人の生をどのように意味づけているかを考察しており、宣長以後においてその神代の事跡と人の生との関わりがどのように組み替えられていくかを終章で述べて本書のまとめとなっている。

紙幅の都合でやや乱暴な整理となったが、詳しくは本書を実際に手にとって確かめて欲しい。とまれ、上にかいつまんで紹介したように、本書は『古事記伝』の論理構成を明快に分析し得ており、宣長が『古事記』の神々にどういった新たな神格を与えたか、どういった概念を用いてそれらの神々を一つの体系にまとめあげたか、そして神々と人の生とをどういった論理で結びつけたかが、詳細かつ包括的に明らかになっている。著名

なわりには通読されることは少なく、つまみ食いの引用されることの多い『古事記伝』であるが、本書が解き明かした全体的な論理構成を把握した上で『古事記伝』に向かうならば、宣長は新たな面貌をもって読者の眼前に立ち現れてくるだろう。

ではあるが、私としては物足りない面も少なからずある。『古事記』を素材に体系的な神代像を描き出すために宣長が用いたロジックはなるほどわかった。しかし、宣長の神代像が鈴屋門弟をはじめ多くの人々を魅きつけ、用いたロジックは異なるとはいえず、平田篤胤という継承者を經由して数多の「記紀神話による新たな神学」を生みだしていったのは何故であるのか、本書は答えてはくれない。ないものねだりをしているわけではない。宣長神学の受容と展開の過程を跡づけるということであれば、それは確かにまた別の問題であり、本書に求めるべきことではない。私が言いたいのは、宣長の「神学」のイデオロギー性^①を言うのであれば、その「神学」を構造的に明らかにするのであれば、『古事記』に宣長が加えた概念操作だけではなく、「神学」がイデオロギーとして力を持つために、人の生の現実がどのように対象化され概念操作されて『古事記伝』のロジックの中に取り込まれていったのかをも問うべきであったということである。

※著者の方法と私の関心のここのあたりのズレは、端的に言えば、思想家のテクストを「イデオロギー」と捉えるか(表象)と捉えるかの違いであるのかも知れない。イデオロギー性の弁証と、イ

デオロギーの受容過程の跡づけとは、別個の作業とされる傾向がある。しかし表象と言った場合には、そのテクストが現実を解釈し意味づけるものであると同時に、それ自身が別の現実として流通し、新たな表象を生みだしていく「力あるモノ」であることがあらかじめ視野に入れられている。

私自身の問題関心に引きつけつつ、少し具体例を挙げつつ述べよう。著者は終章において、神代における人間の生成をどう捉えているかについて宣長と篤胤を比較して、それぞれを次のように位置づけている。宣長の『古事記伝』は人の生成を明確には語らず、神世七代の段階で「既に国処も成り、人物も生てのうへの事」とのみ述べる。ここには「古事記」の示す「神代」から「人代」への時間的連続性のみならず、「神」と「人」の実体的連続性」が示されている——と（二五八頁）。この位置づけは、第五章で著者が考察しているように、神代の神の事跡がそのまま人の生の規範となるような、宣長の神観念の特質と不可分に関わっている。いっぽう篤胤については、神代における人間Ⅱ青人草の伊邪那岐伊邪那神による生成を『鎮火祭詞』に拠りながら明確に語っており、「篤胤は、岐美の時代から統治する神と統治される人が別に存在していたと考える」と捉えている。したがって、宣長の場合にあった神と人との連続性は断ち切れ、神の事跡がそのまま規範となるのではなく、神が人に試練を与えたり死後に救済したりすることで善を勧めるというロジックが成立する——と著者は位置づけている（二六〇頁）。

いっぽう私は、同じような問題について、いわば正反対の結

論を以前に得ている（表智之「語られる〈神代〉と〈現〉」「歴史」の読み出し／〈歴史〉の受肉化」など）。宣長について言えば、『古事記伝』に描かれた神代の事跡は、時間的連続性に拠って人の生を意味づけるのではない。神代の事跡はそれ自体で時間的に完結しており、それが人の生を意味づける力を持つのは、天照大御神が、神話に登場する人格神であると同時に太陽それ自体でもあることによつて、神話の世界と現実の世界とがオーヴァーラップさせられていることによる。人々の眼前に現に輝くあの太陽にまつわる物語として神代の事跡は描かれているのであり、神々と人々は、時間的というよりはむしろ空間的に連続しているのである——と私は捉えている。また篤胤については、神による人間の生成を『古史伝』の中で語ることで、宣長の『古事記伝』が天皇と国家の起源神話であったのとは違つて、すべての人々の生の営みの起源神話を語り得ていると言えよう。神代において神が人間を生成し、生殖から家業にいたるまでの諸々の生産の営みを「事依」した、そのために産霊神は産霊の御霊を人の魂として下されたのだ——と語るることによつて、人々の生の営みは時間的連続のもとに新たな意味を与えられるのであり、この側面をさらに押し進めて鈴木重胤は「修理固成」の概念を創り出したのである。

この違いは、一つには、私は『古事記伝』や『古史伝』をコスモロジーとして捉え、著者はデオロギーとして捉えている点に起因していると考えられる。「コスモロジー」という概念は、

宗教学や人類学で用いる場合には、共同体に生きる人々の心性を個別に調査した結果を集積し、それをたとえば一葉の図に構造的に示したものを指して言う。それに対して、私を含め思想史学で用いる場合には、ある特定の思想家が世界を新たに意味づけようとする作業自体を指して用いる場合が多い。共同体における共有とその構造に前者が注目するのに対して、後者は個人による生産とその過程に注目する、といった違いがそこにある。しかしその一方で、同じテクストを「思想」「イデオロギー」として扱う場合と、「コスモロジー」として扱う場合を対比するとやや別の様相が現れる。前者では思想家個人の内面的な営みをそのテクストの論理構成によって跡づけることでこと足りるが、後者では個人の内面に発した思考が人々に共有されていくそのありようをもテクスト分析から見通さねば考察として意味をなさないのである。

であるから私は、『古事記伝』『古史伝』が宣長や篤胤のコスモロジーであると同時に、門弟をはじめとした読者にとってのコスモロジーでもあり得るのは何故かにこだわった。そもそも『古事記』や『日本書紀』をそのまま読ませて、「ここに我々日本人の原初の姿が記されている」と言ったところで、近世の人々はなにほども納得できなかつたであろう。人々にとつてあくまで疎遠な書物であつたそれら記紀を、みずからの生に関わるリアリテイある物語とするために、読者がみずからの存在をテクストのうちに見いだせるような、読むことによつて世界の姿を

新たな面目をもつて了解できるように物語とするために、『古事記伝』『古史伝』は著されたのである。その際の工夫や戦略を問うた結果、私の上の結論は導き出されてきた。

それに対して本書は、『古事記伝』というテクストがその内部において世界解釈としての一貫性を持つ上でのロジックは明快に述べているが、この宣長個人の世界解釈が人々に共有される契機を明らかにしなくてはならない。あるいは、そもそも視野に入っていない。宣長という一人の信仰者の内面に即して分析するという方法的立場には、一定の有効性がたしかにある。しかし、信仰者としての宣長が直面していた課題とは何なのか、著者自身の言葉を流用して言えば、「新しい「神学」の成立」の背景にある「何らかの宗教上の危機」とは宣長の場合なんであつたのか、それは本書からは一向に見えてこない。終章に少し触れられてはいるが(二七六頁)それとて、政治・社会・経済史の成果が教えてくれる歴史過程から一歩も出てはいない。

一般論になるが、通説的な歴史過程を無批判に受容し、その一般的な通史の流れの中に幾人かの思想家の内面的達成を飛び石のように並べるだけの旧態依然たる思想史から脱却すべき時はもうずいぶん前に来ている。思想家のあるテクストの上で、他のテクスト群や、(テクスト化された)現実や、読者の思いなどが交錯するありようを明らかにすること、テクストの上で政治が、経済が、社会が、歴史そのものが交錯するさまを問うこと、テクストを通してしか書けない歴史を書くことこそ、思想

史の意義である。テクストの内在分析は、そのような思想史の手段であつて目的ではない。その意味で、本書の成果をふまへ、宣長を通じて一八世紀末の日本がいかに捉え直されるのか、活発な議論が今後行われることを期待してやまない。

〔付記〕 本稿は日本学術振興会の研究助成および文部省科学技術研究費補助金（特別研究員奨励金）による研究成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員）

M・ウィリアム・ステイール著

『もう一つの近代——側面からみた幕末明治』

（ベリカン社、一九九八年）

松田 宏一郎

はじめに

本書は、著者がこれまで発表してきた一九八一年から一九九六年にわたる論考をまとめたものであり（ひとつの未発表論文を含む）、対象時期としては開国・明治維新期の研究が中心となるものの、扱っている問題は多岐にわたっている。一冊にまとめられるにあつて、幕末の瓦版や浮世絵版画を主たる素材にした第一部、勝海舟・西郷隆盛などの中心的指導者の政治意識を分析した第二部、地方の村レベルでの政治的リーダーを分析した第三部、柳宗悦論からなる第四部といった構成に整理されている。著者の研究の良さは、英語圏の研究者らしい広いバックグラウンドをうかがわせる問題設定の大胆さと、日本にベースをおいている利点をいかし、中心的な政治家や思想家だけではなく地方史や民衆史などへの目配りの良さをあわせもっている点にあるが、本書ではその点が良く反映されている。

ここに収められた論考に通底する関心は、序文にも簡単に整